―土合と山―

「土合駅発谷川岳山岳史」

土合駅は挑戦への入り口であった

積雪期の谷川岳一ノ倉沢。中央やや右にA型に聳え立つ壁が衝立岩

上越線土合駅の歴史は谷川岳登山の歴史そのものである。大正10年の日本人初となるモンブラン登頂を日高信六郎(後の日本山岳会会長)が成し遂げたことを契機に、続く槇有恒(後の日本山岳協会会長)によるアイガー東山稜を初登攀、国内でも大正13年に厳冬期の槍ヶ岳登頂が果たされるなど、大正末期から昭和初期にかけて、日本における近代登山の黎明期を迎える。困難性をより求めるアルピニズムの勃興であった。

古くは信仰の対象であった谷川岳もこの頃には本格的クライミングのメッカとなっており、登山家で文筆家の大島亮吉をして「近くてよい山なり」と言わしめ谷川岳を世に広く紹介した。昭和6年の上越線の全通に伴い、谷川岳一ノ倉沢へロッククライミングに向かう登山者の数が爆発的に増えたことで併せて滑落や遭難の事故も増え「魔の山」と呼ばれるようになったのはこの頃であった。

同年に満州事変が勃発し日本が戦争へと突き進むその時代の話である。

トンネル内ホームができる以前の土合駅の様子

土合駅は昭和11年に駅として開業した。それまでは水上駅～越後湯沢駅間をつなぐ信号所として機能していたが、谷川岳への登山者が増えたことで駅へ昇格。当時は単線であったためホームは現在のトンネル内ではなく地上に設置されていた。

昭和20年の終戦から昭和30年代にかけて朝鮮戦争による"特需"が生まれたことも後押しし、加速度的な日本の経済成長の中で人々の暮らしには余裕が生まれるようになり、山へ向かいやすくなった。特に、昭和31年の出来事は大衆登山に大きな影響をもたらす。

昭和29年　土合駅ホームで帰りの列車を待つ登山者

―ヒマラヤの未踏峰マナスル(8,163m)に日本隊が初登頂に成功

日本人ではじめての8,000m峰登頂というセンセーショナルなトピックも手伝い、日本社会全体に空前絶後の登山ブームをもたらすこととなった。

"3人寄れば山岳会"といわれるほど日本各地の至るところで山岳会が創設され、週末になると押し寄せるように人が山にやってくるようになった。

この時代には上野発の夜行列車が土合駅に向けて運行されており、首都圏から多くの登山客を乗せていた。明け方に到着するこの列車からは現在では考えられない数の乗客が降車し駅舎内も駅前もごった返していたという。

その一方で、困難な登攀が繰り返されることにより遭難事故が相次ぎ社会問題となる。谷川岳一ノ倉沢でも多くの若者が命を落としていた。

昭和42年　土合駅待合室で仮眠をする登山者

どうしても気になることがある。当時の若者は命の危険を伴う苛烈な登攀へどうしてそこまで夢中になったのか?

ノンフィクション作家・佐瀬稔氏の著書『ヒマラヤを駆け抜けた男』の中である登場人物の回想にこのような記述がある。

―一ノ倉には私の青春がねむっている。そんな感傷を私は捨てることができなかった。わけても、鳥帽子周辺の岩場は、私の青春を一途に傾けた場所だった。戦争に焼きはらわれた私の青春は、ひたすら攀じるという行為の中でのみ燃焼し、非情酷薄な岩との戦いの世界に、せいいっぱいの生きがいを求めようとしたのだ…

また別の登場人物の回想。

―毎日、学徒動員で朝の7時から夜の7時まで工場で働き、家に帰るともう何もする気力がない。どこを見回しても希望というものがない。戦場に出て死ぬのを待つだけ。そういうとき、たったひとつだけ、自分の意志で自分の行動を決定できたのが、山登りでした。ふだんの時間はまるで死んでしまっているような自分が、わずかの間、生き返る、自分の意志で生きているという実感があった。―何かほかに趣味はなかったのか、といわれても、そうやってギリギリに生きている以外に、あのころの私には、ほかにはなんにもなかったんですよ。

戦後から高度経済成長期にかけての時代と現在とでは、若者を取り巻く仕事や暮らしの環境が全く異なるため、今昔の思想や思考の比較は無意味であると思うが、己のアイデンティティや生の実感を確かめたいという情熱は不変であるのだろう。全てを懸けてそれをぶつける場所が岩場であり、谷川岳一ノ倉沢という大岩壁であったという事実は腹落ちする。

群馬県内の山岳会メンバーをはじめ国内有数のクライマーたちが谷川岳一ノ倉沢の登攀により技術を磨き、自信を深め、世界へヒマラヤへと旅立っている。当時の合言葉は〝谷川岳からヒマラヤへ〟であった。

谷川岳山岳資料館で館長を務める八木原圀明さん（現：日本山岳・スポーツクライミング協会会長、群馬県山岳連盟顧問）もそのうちの一人。20代前半で谷川岳一ノ倉沢の衝立岩登攀において最も困難といわれた直登ルートを開き、その後は活動の場をヒマラヤ登山へと移し、現在に至るまで永きに亘り日本の登山界を牽引する第一人者である。

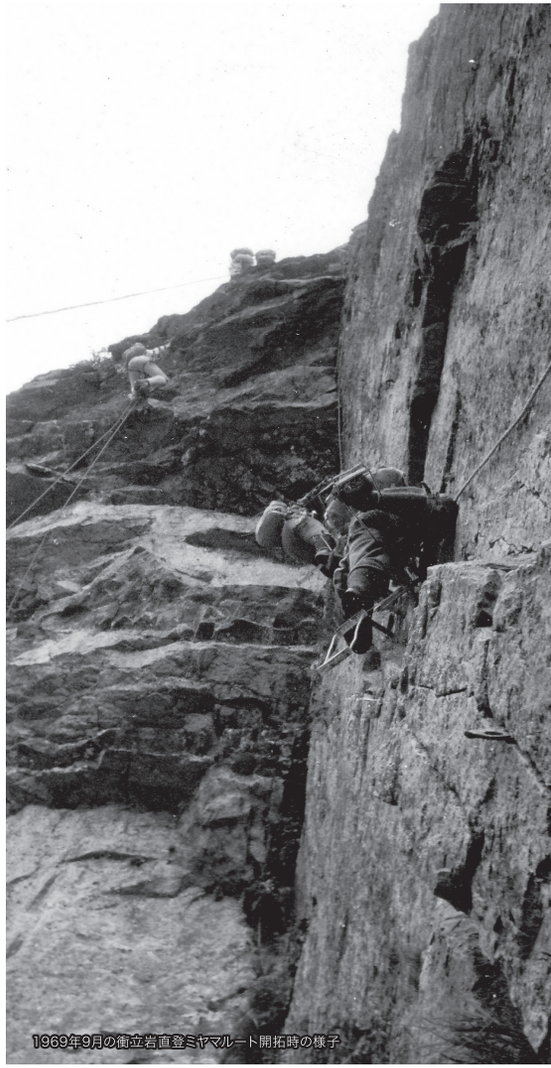
「死ぬかもしれない岩場に本当は近寄りたくなかった。直前まで雨になればいいなとか、吹雪になればいいなとか、中止にならないかと考えているのだが、一ノ倉の岩壁の目の前に立つとやっと諦めがつく。仕方ねえ、登るかと。」

文字通りまさに決死の覚悟が必要であったという。

では、何故登るのか？

八木原さんは著書『氷壁に刻む』の中でこう書いている。

― 大自然は登山家の実践の舞台である。何故山に登るのか？ の問いに、一言で答えられる登山家がいるはずもない。それは何故生きるのか？ と同じ問いかけだからである。様々な思いの中で登り、生きている。登ること、登頂することだけを目的とし、その目標ゆえに多くのものを捨て続けていく。皆が一様に欲しがる安穏も、安定もである。



1969年9月の衝立岩直登ミヤマルート開拓時の様子

谷川岳やヒマラヤ登山の歴史に触れることができる谷川岳山岳資料館では、当時の登攀道具や資料をみることができる。そして此処で是非、何故山に登るのか？ という問いに想いを巡らしてほしい。

谷川岳は人が生きる意味と情熱をぶつける舞台であり、挑むものの背中を「いってこい」と送り出し、また「おかえり」と迎え入れる。登山者にとって家のような駅が土合駅であったのだ。

谷川岳山岳資料館での八木原館長（2021.5.3撮影）

●当時の写真：谷川岳山岳資料館提供　●参考文献：佐瀬 稔 著「ヒマラヤを駆け抜けた男 ―山田昇の青春譜―」｜ 中央公論社、八木原 圀明 著「氷壁に刻む ―山田昇・八木原圀明 二人の登攀史―」｜ 上毛新聞社

■文・写真：Kengo Shibusawa（GENRYU）